大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

私と生命学：これまでの経過と今後の議論のために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 正博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/12766

The Review of Life Studies Vol.2 (April 2012):1-10

私と生命学
これまでの経過と今後の議論のために

森岡正博*

1　発端

私が「生命学」という言葉を作り出したのは、1988 年のことでした。そのころ私は大学院生をしていましたが、自分が学んでいる「生命倫理」というものに、大きな不満をかかえていたのでした。きっと、そのモヤモヤした気持ちが、「生命学」という言葉を生みだしたのでしょう。

「生命学」という言葉が、1980 年代の日本の「生命倫理」から出てきたというのは、きっと何かの重要な意味をもっているのだと思います。「生命学」という発想が生まれてくる何かの歴史的必然性が、そこにはあったはずです。

当時、私の心の中には、生と死の問題や、人間と自然との関わり方などを、幅広く考えていきたいという強い思いがありました。私はなぜ生まれてきたのだろう、私はどうして死ななければならないのだろう、この広い地球の上に放り出されて、短い人生を送らなければならないのはなぜだろう、という問いを繰り返し考えていました。また、生命あるものは、個体の死を超えて、つぎつぎといのちを受け渡していきます。そのような自然界の生命の連鎖に、この私もまた埋め込まれているのだということをどう考えればいいのか。生命あるものはすべてがつながりあって生きているのに、どうして私は、ぽつんと孤独なままで存在しているのだろうという疑問もありました。

生まれ、成長し、再生産に関与し、老い、死んでいくという、この生命のありさまを、納得できるまで考えていきたいという強い気持ちがありました。それらのテーマを、単にアカデミックな学問として考えていくだけではなくて、いまここで生きている自分自身との関わりの中で、考えていきたいと思っていました。なぜなら、自分自身の生と死から切り離された「生と死の学問」なんて、無意味だと思っていたからです。死について考えているこの私自身が、やがて死んでいきます。自分自身を繰り入れて考えないような生命論は不毛だと思っていたのです。

そのような思いを抱えながら、私は研究者の道に入っていきました。

1980 年代の半ばから、脳死臓器移植や、男女産み分けの問題が、新聞やテレ

* 大阪府立大学教授　〒599-8531 堺市中区学園町 1-1 大阪府立大学現代システム科学域

ビなどで大きく取り上げられるようになりました。それらは、体外受精や遺伝子操作や安楽死などの問題と一緒になって、生と死の倫理という難問をわれわれに突きつけてきたのでした。ちょうどその頃、米国のバイオエシックス（生命倫理学）という学問が、学者たちによって輸入され始めました。私も英語の論文をいくつか翻訳しました。

しかし、私はすぐに大きな壁にぶつかってしまったのです。というのも、倫理的に何が正しくて何が間違っているのかを緻密に議論する彼らの学問に、大きな閉塞感を感じたからです。なぜかと言えば、何が良くて何が悪いのかを理屈で分かっていたとしても、人間はそのとおりには行動できないものです。「分かっているけど、できない」というのが人間です。しかし、私の学んだ生命倫理学は、人間をそのようなものとして捉えようとはしませんでした。そんなことでは、泥沼のような人間の生と死を正面から考えることはできないのではないか、と私は思ったのでした。かといって、いくら倫理を説いても結局は無駄なんだ、というような開き直りをするのもいやでした。「正論」にも「開き直り」にも陥らないような道が必要ではないかと思ったのです。

理詰めで正論ばかりを説く学者に対しては、「ではあなた自身はいままでどのように生きてきたのか、そしていまどのように生きているのか」と問いたい気持ちになりました。「私はこういうふうに生きていきたい」という願いと、「しかし実際はそのように生きていけない弱い私がいる」という現実の、そのあいだで揺れ動く人間の姿というものが、生命倫理学ではほとんど捉えられていないように思えたのです。「考えること」と「実際に生きること」のあいだにある切実な緊張関係から出発する学問が必要なのではないか、と私はそのときに思いました。そして、私はそのような学問を「生命学」と呼ぶことにしたのです。私の最初の本『生命学への招待』（1988 年）には、その決意が素朴な形で表明されています。

> 生命学は、「学問」というもののあり方に、一石を投じることができるのではないか、と考えることがある。生命学とは知識をただ与える学問ではなく、生命を持った私・私たちが、生命のただ中で生きてゆく、その生き方に何かを与える学問なのではないだろうか。言い換えれば、知ることがすなわち生きることにつながり、生きることがすなわち知ることへとフィードバックされてくるような学問のあり方を、示唆しているのではないだろうか。真理を追求する学問から、私たちが生きるための学問へ。[1]

「知ること」と「生きること」のあいだにある緊張関係というのは、実は、哲

[1] 森岡正博『生命学への招待』勁草書房、1988 年、15 頁。

学の中では古くから考え続けられてきた問題なのです。私は、現代の生命倫理の問題を考えていくなかで、その古来からの問いに正面からぶつかってしまったのでした。生命学の原点は、ここにあります。ある意味で、生命学は、生命倫理学の限界を内側から破ろうとする試みとして誕生したのです。

また、私には、生命についての思索をもっと学際的に開いていこうという意図がありました。米国の生命倫理学は、自然環境の問題を扱いませんでしたし、非常に窮屈な学問でした。

またこの本のなかで、私は「姥捨山問題」という問題提起をしました。われわれは、これから襲ってくる苦しみから逃れるためならば、あるいはいまよりも楽になるためにならば、少々他の人々が犠牲になっても仕方ないし、目に見えないところの人々が死んでしまっても仕方ないと思っているのではないでしょうか。中絶問題、老人施設問題、南北問題などは、そのようなわれわれのエゴイズムから生まれるのではないでしょうか。そしてさらに大事なことは、そのようなエゴイズムを行使する自分の姿から目をそらすための仕組みが、この社会の中には埋め込まれているのではないでしょうか。私は、人間の心と社会の中に埋め込まれたこのような仕組みのことを、「姥捨山問題」と呼んだのでした[2]。私の生命学には、当初から、人間のエゴイズム、苦しみ、それらから目をそらさせる社会の仕組み、というものへの問題意識があったのです。これは、その後の私の思索の根本テーマのひとつとなり、後の「無痛文明」というアイデアへと結実することになります。

その後に出版した、『脳死の人』（1989 年）では、脳死と臓器移植の問題を、人と人との関わり方という面から捉えなおしました。脳死問題を「関係性」の視点から考えるというのは、それまでの生命倫理学には乏しかった発想でした。この本は、生命学的な視点が生かされたものとなりました。

また『生命観を問いなおす』（1994 年）では、もっと長く生きたい、もっと快適な生を送りたいというわれわれの「欲望」と、それを具体化するための社会システムが、みごとに結びつくことによって、現代の病理が生まれてきているのではないかと主張しました。「欲望」の問題が、生命学のテーマとして浮かび上がってきたのです。

私は学者、あるいは物書きとして、これらの本を書きながら、生命学という発想を深めていこうと思っていました。しかし、「私と生命学」という視点から見れば、私はまだ「生命学」とは真に出会っていなかったのです。学者として、机上の論を積み木のように組み立てていただけなのでした。

2　気づき

[2] 同書、第 10 章。

それを、もののみごとに打ち砕いたのが、1995 年のオウム真理教事件でした。信者たちは、悟りと超能力にあこがれ、それを手に入れることによって、この汚れた世界を根本から変えて、みんなを幸せに導きたいと考えていました。彼らは麻原というグルを信奉して、閉じた共同体を作り、最後には、サリン事件を起こしておびただしい数の殺戮と傷害事件を起こしてしまいました。理想と希望に向かっていたはずの宗教活動が、どうして、このような破壊活動に向かってしまったのでしょうか。彼らのことを調べていくうちに、ほかならぬ私自身が、オウム真理教信者と同じものをかかえていることに気づいたのでした。ひょっとしたら、この私もオウム真理教に入っていたかもしれない。であるから、真に考えるべきは、この私自身のことなのではなかろうか、と思いはじめたのでした。オウム真理教について書いた『宗教なき時代を生きるために』(1996 年）では、私は自分自身のことをたくさん語りました。

私は自分のそれまでの人生について、自己告白的に語りながら、科学と宗教の問題に迫っていくという手法を取りました。そうすることによって、オウム真理教という事件を、いまここで生きている「この私の人生」と切り離すことなく考えることができると思ったからです。私がなぜこの問題を考えるのか、私がこのテーマを考えようとしている必然性はどこにあるのか、私はいままでどのように生きてきたのか、そしてこれからどのように生きていくつもりなのか。その地点から考えはじめることで、「考えること」と「実際にこの私が生きること」を、固く結びつけたまま学問をすることができると思ったのでした。

このエッセイのテーマである「私と生命学」という点で言えば、この『宗教なき時代を生きるために』を書いていくなかで、私ははじめて生命学というもののほんとうの姿に気づいたのだと言ってよいと思います。つまり、生命学を、この私の実人生から切り離すことは、けっしてできないということです。

この本で書いたように、実は私もまた、悟りと神秘体験をもとめていた時期があり、閉じた共同体の中で甘い蜜を吸っていたのでした。しかし、そういう世界に居続けているうちに、自分がするべきだと思っていることと、自分が実際にしていることのあいだの溝が、どうしようもなく広がってきたのでした。そして「生命世界は調和と共生に満ちていなければならない」と主張していた私が、実生活の中で、自分自身の身体の底から沸き上がってくる暴力衝動に突き動かされて暴力をふるってしまったとき、私はそれまでの自分自身の思索が無になってしまったことを身をもって知ったのでした。

おそらくこのとき、私は、自分が提唱していた「生命学」というものに、真に出会ったのだと思います。私は次のように書きました。

> 私が選び取るのは、私が理想や理屈や美しいことを口では言いながらも、実際の行動ではそれを裏切るようなことをたくさんしてしまう人間であるという、その事実をまず直視する、そういう道である。・・・(中略)・・・そして、そのことを認めながらも、しかしながらそういう自分にけっして居直ることなく、現状のままでも仕方ないんだと開き直ることもせず、かつ、こういうことで悩んでいるということを自己弁護の道具として使用することもせず、自分を変容させる可能性があるときにはつねに自分の人生を賭け、そうやって自分に内在したペースで生の意味を果てしなく模索してゆく、そういう道があるはずだ。[3]

生命について広くかつ深く考えていくことと、いまここで生きている実際の自分の人生を目隠しすることなく点検していくこと、この二つが揃ってはじめて「生命学」が成立するのだということを、私は思い知らされたのでした。

翌年の『自分と向き合う「知」の方法』(1997 年)で、私はこのことを、「自分を棚上げにしない」思想と表現しました。

> この本で、私が言いたいのは、自分を棚上げにする思想は終わった、ということだ。・・・(中略)・・・人は、ものごとを、自分に都合のいいように正当化しよう、正当化しようとする。私もまた、そういう罠に、何度も落ちてきた。だから、「自分のことを棚に上げて考えよう」とか、「自分に都合のいいように正当化しよう」という無意識のこころのはたらきが出てきたときに、それを最後のぎりぎりのところで食い止められるような知性が、いまどうしても必要なのだ。[4]

「自分を棚上げにしない」というキーワードが、こうして登場したのです。

「自分を棚上げにしない」こと、これが生命学を生命学たらしめている、最大の特徴です。自分を棚上げにしないなんて、簡単で当たり前のように見えるのですが、実はこれこそが、現在のアカデミズムの学問のアキレス腱なのです。これこそが、いま学問を考えるうえでの急所なのです。自然科学は自分を棚上げすることによって成立していますし、社会科学もまた、自分を棚上げする方向へと学問を洗練させてきました。しかし生命学は、それらとは逆の道を行くのです。

同書から、別の個所を引用してみましょう。

---

[3] 森岡正博『宗教なき時代を生きるために』法藏館、1996 年、135-136 頁。
[4] 森岡正博『自分と向き合う「知」の方法』ちくま文庫、1997 年、2006 年、1-2 頁。

> このように「生命」を問うとは、やがて死ななければならない私自身の生と死を問うことであり、私という生命が組み込まれているところの現代社会について考えることであり、このような社会を生み出してきた我々の歴史を捉えることであり、そして私がそこから生まれ、そこへと死んでいくところの地球生命圏について考えることでもある。それらの問いを、ばらばらに考えるのではなく、お互いに深く連関し合ったひとつながりの問題群として考えていくこと。それが「生命学」の基本である。そのときに大事になるのが、まさに、自分を棚上げにしない思索なのだ。[5]

いまここで生きる自分を棚上げせずに、自分自身の生と死について考え、それを支える人間や社会や歴史について考え、それを取り囲む自然世界について考え、そこで得られたものを糧としながら、いまここでの自分自身の生を吟味して生きていくのが生命学だ、ということなのです。

こうやって、生命学とは何なのかを、少しずつ言葉にすることができるようになってきました。生命学という営みが、霧の向こうから、ようやく見え始めてきたのです。

3　展開

そのような視野をもって研究を続けていくと、いままで見えなかった様々なことが見えてきました。まず、いま述べたような意味での生命学を強烈に実践していた人々がいたことが分かってきました。

それは、1970 年代のウーマン・リブの女性たちと、脳性マヒ者の「青い芝の会」の人たちでした。私が生命学と呼んだものを、彼らはすでに 30 年も前に、全身で生き抜いていました。私は、彼らが書き残したものをたんねんに調べました。そして彼らから多くのことを学びました。私の『生命学に何ができるか』（2001 年）は、その報告です。

彼らは自分たちがなぜ生きにくいのかを突き詰めて考えました。なぜ生きにくいのかと言えば、それは彼らが、「自分は生きる価値がない」という自己否定の状態に追い込まれているからです。彼らをそのような状態に追い込んでいるのは、この社会のマジョリティの人々と、それらの人々によって作られたこの社会構造にほかなりません。だから、自分たちが自己肯定して生きることができるようにするために、つまり「ありのままの自分でいていいんだ」と心から思えるようになって、実際に生き生きと生きていけるようにするために、この社会を変えていかなくてはならないと彼らは考えたのです。

---

[5] 同書、37 頁。

と同時に、彼らは、マジョリティの人々がもっているのと同じエゴイズムや欲望や悪を、自分たち自身も持っているという事実から、目をそらしませんでした。自分の外側にいる敵と戦うだけでなく、みずからの内なる敵とも戦う必要があると彼らは考えたのです。また彼らは、自分たちの考え方や行動の矛盾を他者から突きつけられたときに、自分が「揺らぐ」ことが大事だと考えました。首尾一貫した自己を守るのではなく、他者と出会い、衝突し、揺らぎながら前進してゆくことこそが、自分を棚上げにせずに生きている証拠だ、と彼らは言いたかったように私には思えるのです。

この本の最終章で、私は生命学のアウトラインを書こうと試みました。その内容は多岐にわたるのですが、そこからいくつか抜き出してみたいと思います。

まず私は、生命学を、「私が、限りあるかけがえのないこの人生を、悔いなく生き切るための知の運動」として捉えました。限りある人生を「悔いなく生き切る」というキーワードが、ここから生まれました。一度きりしかない、このかけがえのない人生を、悔いなく生き切るために必要とされる知が生命学であり、また、悔いなく生き切ろうとすることそれ自体が生命学なのです。

> これは、欲望や、悪や、死などの限界性を背負ったわれわれが、現代文明のなかで悔いのない人生を生き切るとは、いったい何をすることなのかを探求してゆくことである。そしてその探求を原動力にして、実際に、悔いのない人生を生きてゆくことである。[6]

また、このようにも書きました。

> 生命学は、自分の実人生における問いの明確化と、それへの決着を優先させる。悔いなき人生を生き切ることが生命学の目標なのだから、自分が発見したことを自分自身の人生に反映させて、みずからの人生に決着を付けることを最優先させなければならない。そのような私の行為は、私のその後の人生をとおして、人々へと伝わっていく。論文や、作品を書き残すことのみが学問なのではない。みずからの生に決着を付けながら生き続けることそれ自体が、学問となりえるのである。「自分を棚上げにしない思想」とは、このことを指している。[7]

このことは、さらに以下のように展開されます。長くなりますが、引用したいと思います。

---

[6] 森岡正博『生命学に何ができるか』401-402 頁。
[7] 同書、403 頁。

まず、私の「生き方」としての生命学というものがある。このように言うと、生き方そのものはけっして「学問」にはならないという反論が返ってくる。それに対して、私はあえて、生き方そのものが学問の営みと融合しているような学問は存在し得ると答えたい。ある学問が生命学であるためには、その成果が自分自身の人生において実際に生きられることが必要となる。生命学とは、そもそも、そのような学問として構想されているのである。自分の人生へのフィードバックなしでも成立するような机上の思弁や、論理ゲームや、自分を棚上げにした実証研究・自然法則探求は、生命学にはならない。・・・（中略）・・・悔いのない人生を生きるために発案されたことは、実際に自分の人生において実験し、その効果を我が身をもって検証する。そして、自分の実人生での実験・検証の結果を公開し、生命学を営んでいる他の人々とその結果をめぐって対話し、お互いに学び合ってゆくのである。・・・（中略）・・・生命学は、自分自身の人生における実験と検証によって、独断を排そうとする、一種の「実験学」なのである。自然科学は、外部世界を実験の対象とした。認知心理学は、他人を実験の対象とした。生命学は、最後に残された自分自身を実験の対象にするのである。生命学においては、自分自身が、自分自身の実験動物になるのである。[8]

自分を棚上げにしないとは、考えたこと、提唱したことを、かならず自分自身の実際の人生に当てはめてみるということであり、その結果分かったことをふたたび思索の材料にしていくことです。そして、そのプロセスを人々と分かち合い、伝えていくことです。このように、自分自身の人生を実験台とするときに、生きることそれ自体が学問になるのです。このように、生命学を一種の実験学として捉えることで、「考えること」と「実際に生きること」を学問の名のもとに結合させることができるのだと私は考えました。

2003 年には、『無痛文明論』という本を刊行しました。これは、それまでの私の思索を集大成したものであり、この本の中では、生命学の具体的なテーマがいろいろな角度から論じられています。生命学の視点から見たとき、現代文明とは、「快楽」と引き替えにわれわれから「生きるよろこび」を奪い去ろうとする文明に他なりません。苦しみの少ない方へ、気持ちのいい方へと流されていくわれわれは、やがて生きる意味を見失い、溢れるモノと心地よさに押しつぶされていくのです。私たちひとりひとりが、無痛化する社会とどのように戦えばいいのか、どのように生きればいいのかを、私は問いかけました。生命について考えていくとき、それは必然的に、生命を取り巻くこの文明全体について

[8] 同書、421-424 頁。

考えることになるのです。生命学は、現代文明や科学技術のあり方を根本から問いなおすところにまで至るのだ、ということを、『無痛文明論』は明らかにしました。

しかし、この本は、けっして最終的な答えを与えるものではありません。『無痛文明論』を書くことによって、私はさらに大きないくつかの問題にぶつかってしまったのです。それを考えていく作業を、いま行なっているところです。

2005 年には『感じない男』というセクシュアリティ論を書きました。これは、『宗教なき時代を生きるために』で用いた「私語り」の手法を、ぎりぎりまで押し進めたものです。自分を棚上げせずに生命の問題を考えようとしたときに、私は自分自身のセクシュアリティの問題を避けて通ることはできませんでした。そしてまた、自分を棚上げにしないという方法論を取ることによって、もっともクリアーに見えてくるものこそが、自分自身のセクシュアリティの問題であるということに、私は気づきました。人は、セクシュアリティの問題を、いつも他人事として語ります。しかしそれは生命学からはもっともかけ離れたやり方です。この私が実際にどうなのか、というところから始まるセクシュアリティ論こそが求められているのではないかと思いました。

私は、自分が男の身体へと成長したことを自己肯定できていなかった、ということを発見しました。それが、セクシュアリティの次元での「生きにくさ」を生み出しているということに気づきました。そのことが、どのようなねじれとなって私のセクシュアリティに影響を与えているかを自己分析し、これからの生き方を探りました。この試みそれ自体が、生命学のひとつの実践だったと私は考えています。

４　今後の展開

私は、このような道筋を通って、生命学に出会ってきました。この道はまだ中途であり、これからまた様々なことが起きるでしょう。私がいままで考えてきたこと、これから考えていくこと、私がいままで生きてきたこと、これから生きていくこと、それらすべてが渾然一体となったものが、私の生命学なのです。

2005 年に、私は仲間たちと、生命学研究会という集まりを作りました。私ひとりで考えるのではなく、同じような問題意識をもった人々と、知恵を出し合って、みんなで進んで行こうと思いました。そこでの話し合いを経て、「生命学とは、自分をけっして棚上げにすることなく、生命について深く考え表現しながら生きていくことである」という生命学の基本的発想が、固まってきました。生命学という一個の体系があるのではなく、生命学の基本的発想に向き合おうとする各自のそれぞれの生命学の営みがあるだけだ、ということも分かってき

ました。私は、森岡の生命学を「悔いなく生き切るための生命学」としてまとめ、論文「生命学とは何か」[9]として発表しました。

これから生命学は新たな段階を迎えます。生命学の基本的発想に主体的な関心をもった人々が、お互いに刺激を与えあい、お互いに学び合いながら、多様性に富んだ各自の生命学を作り上げていく段階に入ったのだと私は考えています。これから、みなさんと関わりながら、生命学を大切に育てていきたいと思います。

註で触れなかった著作

森岡正博（1989）『脳死の人』法藏館
森岡正博（1994）『生命観を問いなおす』ちくま新書
森岡正博（2003）『無痛文明論』トランスビュー
森岡正博（2005）『感じない男』ちくま新書

＊この論文は、2007 年に開催された生命学研究会のために執筆され配布されたものを、2012 年に本誌に採録したものである。したがって内容は 2007 年時点のものである。
＊*The Review of Life Studies* は Life Studies Press の出版物である。
(www.lifestudies.org/press)

[9] 『現代文明学研究』第 8 号、2007 年、447-486 頁。